

# 毛公鼎偽造説と陳介祺

大西 克也

私が中国語史研究の材料としているものの一つに西周時代の青銅器銘文がある。器の内側に鑄込まれた文字であるが為に、改竄の加えられる余地は殆どなく、歴史や言葉の研究資料として優れた価値を持つことは言うまでもないが、しかしそれでも時には偽作銘ではないかと疑わねばならぬこともある。毛公鼎といえ他に類を見ない長大な銘文を持つことにより、世の愛好家たちから格別の扱いを受けてきた器であるが、同時にその真贋をめぐってとかく噂の絶えなかった器としても有名である。毛公鼎を研究資料としないのが、良心的な学者の慎みであるかのように考えられた時期もあった。なぜ毛公鼎が偽物扱いされるに至ったのか、それに纏わる話を見ていくことにしよう。

前世紀に入ると周代青銅器の出土が頻繁に見られるようになるが、毛公鼎は中でも青銅器の「産地」として知られる陝西省岐山県で出土したとされる。西安から渭河に沿って百キロあまり遡ったあたりにひろがるこの盆地一帯は、西周時代の中心地であった。岐山県はちなみに岐阜県と姉妹都市でもある。恐らく開墾中の百姓にでも掘り出されたのであろうか、この鼎は屑鉄屋に売り渡され、哀れ銅塊に化せんとするところを骨董商の目に留まり、北京の著名なコレクターであった陳介祺の手に帰した。咸豊2年(1852年)のことである。ところがこの商いを仲介したのが蘇億年、通称蘇六という名うでの偽物作りであったことから、毛公鼎が贋鼎ではないかという噂が囁かれるようになる。殷代の甲骨の場合も同じなのだが、無字のものより有字のものが高く売れることがわかるようになる。骨董商の中には無銘の器の中に自分で字を刻り込んで値を吊り上げるものが現れる。蘇六の手口もまさにこれであって、彼は弟の蘇七(兆年)や鳳眼の張といった輩とともに刻字の名手として知られていた。しかしかにか名手とはいえ、根が商人であるから稚拙な字である。また刻銘と鑄銘では筆致が異なっているから、経験を積んだ眼には一目で見分けがつく。けれども商売の

成り立つところその毒牙にかかるものもいるわけで、葉某という老先生は、蘇六の捏造した百二十字余りの偽刻銘に自ら脳汁を絞って賛歌を作った挙げ句、人にまで詩文を作らせたということで、このような失態には仮借のない中国の学者たちから残酷に嘲笑されている。陳介祺という人は、こと真偽の鑑定や拓本の技法に関しては清朝金石学者の白眉であって、蘇張の如きに騙される人物ではない。現に彼が毛公鼎の手拓本に付した跋文は、今日の考古学的知見を以てしても、毛公鼎が真器であることを証す一つの根拠たりうるものである。しかしその卓抜した鑑識眼が災いしてか、彼こそが毛公鼎偽作の真犯人とされるに至るのである。

いつの時代でも收藏家というものは自蔵の優品を誇りたがるものである。しかし陳介祺は数人の親友に拓本を頒け与えた他は、毛公鼎を秘蔵して終生人に見せようとしなかった。のみならず鼎を得た二年後には病と称して致仕し、故郷の山東省濰県に帰っている。当時の政治家の中には己の権力に飽かして蒐集するものが居り、逸品を蔵していたがために命を落とした收藏家もいたという。彼は懷璧の累を恐れたのである。陳介祺が隠遁した後、毛公鼎の拓本は稀覯本として極めて高額で取り引きされるようになる。鼎を目撃したものはなく、高価な拓本だけがわずかに世に行われるという状況が、それに対する妬みも手伝って、陳介祺偽造説を生んだのが実状であろう。

これとは別に、陳介祺が毛公鼎のレプリカを作製したという話が伝わっている。当時彼の故郷濰県では、先祖の葬祭に古代の青銅器を供える風習があった。毛公鼎の噂を伝え聞いた近隣の人々の借用申し込みが絶えず、これに辟易した陳氏が貸し出し用に作ったとも、権貴の人の来購に備えて作ったともいわれている。近年、台湾の故宮博物院に所蔵される毛公鼎と陳氏の手拓本との詳細な比較が行われ、現存器の嫌疑は晴らされたが、偽器の拓本が別に2種あることも明らかになっ

---

た。これが陳氏の手になるものか定かでないが、銅器の鑑定に並ならぬ関心を示した陳氏の家には、優秀な鑄工が何人も雇われており、実際に銅器の鑄造を行っていたようである。そのせいか、濰県一帯は古来偽物作りの名所である。このような土壌も陳氏偽造説を生む一因となったのであろう。中国のレプリカ製造業は、現在では外貨獲得に大いに貢献しており、これには陳氏の寄与するところが大きいというのが彼に対する今の評価である。

陳介祺は彼の恐れた懷璧の累に遭うことなく、

光緒10年（1884年）72歳の生涯を終えている。彼の希世のコレクションは死後権勢家の垂涎の的となり、あらかた散逸してしまった。毛公鼎も、直隸総督の地位にあった満人の大官端方の得る所となる。その後この鼎の辿った道筋は、まさに中国近代の歴史である。日中戦争の戦火を避けて上海、香港を転々とし、戦後上海の軍統局で発見された時は、ごみ箱に使われていたという。その詳細を述べるゆとりは今はないが、いつか台北にこの鼎を訪ない、その数奇な運命を改めて思い起こしてみたいものだと言っている。